

## 学校研究 教師が主体的に学び、継続的に研修していくためには? : 研修を通じて自立活動への意識はどのように変化していくか

著者	佐々木 高一, 杉林 寛仁, 村主 光子, 城戸 宏則, 川間 健之介
雑誌名	研究紀要
巻	52
ページ	87-91
発行年	2016-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151857">http://hdl.handle.net/2241/00151857</a>

# 教師が主体的に学び、継続的に研修していくためにはⅢ

—研修を通じて自立活動への意識はどのように変化していくか—

○佐々木高一 杉林寛仁 村主光子 城戸宏則 川間健之介

## I. はじめに

肢体不自由特別支援学校では、学校組織としてどのように専門性を継承していくかが喫緊の課題となっている。そこで当校では平成23年度より、学校組織における自立活動の専門性の継承において、「研修の内容を授業にいかす」「授業で出てきた疑問を研修で解決する」ことを意識し、①動作法、静的弛緩誘導法、知覚運動学習の3つのうちから1つを選んでの指導法研修（個別の指導計画の研修を含む）、②自立活動の時間の指導内での学び合いによる授業内研修の2つを設定し、「メンタリング」や「同僚性」の機能を活かしながら校内研修に取り組んでいる。

2年間の研修によるアンケート及び聞き取り調査を実施し、当校教員の自立活動の時間の指導への意識がどう変化したかを見たところ、当校肢体不自由教育経験5年以下の教員では、実態把握や目標設定が良い方向に変わったと評価した回答が多く見られた。このことから、「メンタリング」や「同僚性」の機能を活かしながら研修を行うことで、自立活動の専門性を高めることにつながる事が推測された。また、指導法研修に関するアンケート及び聞き取り調査からは、子どもの課題を捉え、その改善に向けて指導者自ら考えて指導していくことを下支えする研修内容の重要性が挙げられた。

今回は上記の研修を通じて、自立活動への意識が経年でどのように変化していくかに注目し、教師が主体的に学び、継続的に研修していくようになるためのポイントや年限の目安について言及し、これまでの成果をまとめたい。

## II. 方法

肢体不自由教育経験がなく、2013年度に当校に赴任した教員1名（20代）に対して、自立活動に関する研修について2013～2015年度に行った聞き取り調査の回答を、年度ごとに整理した（表1）。

整理した回答から着目する観点として、「不安に思う」、「できることが増えた」、「子どもの変化を実感する」、「課題意識の向上」の4つのカテゴリーを設定した。

分類する基準として、不安、自信ない、分からない等の語句を含む文を「不安」、なんとなく分かる、少しできる、実感できる等の語句を含む文を「できることが増えた」、手ごたえ感じる、変化感じる等の語句を含む文を「子どもの変化を実感する」、研修必要、実技をやる等の語句を含む文を「課題意識の向上」とした。これらの語句を含まない文についても、その文の印象からカテゴリーに入れるべきものもあるため、整理した回答を1文ずつ確認しながら、どのカテゴリーに含まれるか、またはどのカテゴリーにも含まれないか分類した。

集計には計量テキスト分析のための制作されたフリーソフトウェア「KH Coder」を使用

し、各年度の文章全体に占める各カテゴリーの割合を示した。

### Ⅲ. 結果

2013年度に得られた回答は計18文であった。そのうち「不安」に分類されたものは7文(38.9%)、「できることが増えた」に分類されたものは1文(5.6%)、「子どもの変化を実感する」に分類されたものは0文(0%)、「課題意識の向上」に分類されたものは0文(0%)であった。

2014年度に得られた回答は計19文であった。そのうち「不安に思う」に分類されたものは3文(15.8%)、「できることが増えた」に分類されたものは3文(15.8%)、「子どもの変化を実感する」に分類されたものは1文(5.3%)、「課題意識の向上」に分類されたものは4文(21.1%)であった。

2015年度に得られた回答は計21文であった。そのうち「不安」に分類されたものは5文(23.8%)、「できることが増えた」に分類されたものは6文(28.6%)、「子どもの変化を実感する」に分類されたものは1文(4.8%)、「課題意識の向上」に分類されたものは3文(14.3%)であった。

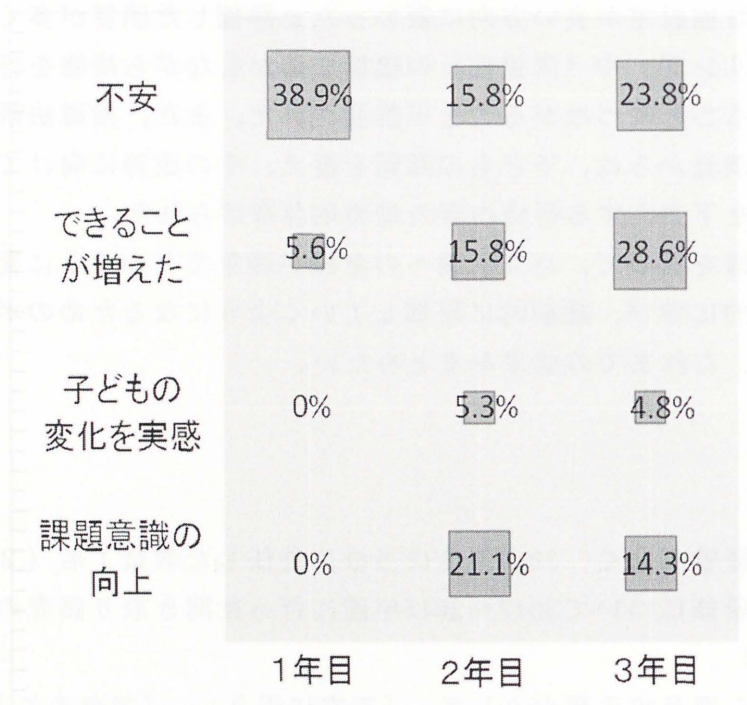


図1 研修を通じての3年間の変化

表1 聞き取り調査で得られた回答

<p>【研修1年目(2013年): 肢体不自由教育経験1年目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何も分からない状態だった。そのため、全般的に良い方向に変わった。はじめてだったので、子どもをどのように見ていいかも分からなかった。</li> <li>・コース研修で身体の動かしにくさについての実技があり、それを通じて子どもの動かしにくさを体験でき、子どもの様子を見る参考になった。</li> <li>・目標設定については、城戸先生に聞きながら考えることができた。ただ、授業中に困ったことや分からないことがあったとき、1対1で子どもと対応しているので、その場ですぐに解決できないことがあった。</li> <li>・その子の実態把握から目標設定、指導内容についての一連について、これで合っていて正しいのか不安があるからである。できれば、年度の早い時期にケース会をしてその子の実態を共有できる場があると良い。</li> <li>・昨年度は年度途中で、担当する子の難しさを知ったということもあった。また、前年度の担当者が時間の指導でどういうことをやっていたのかを知ることも必要だと思った。</li> <li>・「一人で時間の指導ができる」「時間の指導に自信をもってできる」は研修を受けてもまだ難しい。</li> <li>・コース研修を受けて、いろいろなアプローチの方法を学べた。</li> <li>・時間の指導の担当生徒には、授業で自己の身体のケアの仕方(ストレッチ)を身につけさせたく困っていた。</li> <li>・セミナー研修で骨盤をひねって緩める方法を学べ、それを授業に活かすことができた。</li> <li>・また、動きを交えた実技中心の研修で、指導技法や子どもの見かたを学べた。</li> <li>・ケース会については、夏にKJ法で詳しく課題の関連を見るというやり方があることを知れてよかった。やり方はいろいろあるようだが、大事なのは共有することだと思った。</li> </ul>
<p>【研修2年目(2014年): 肢体不自由教育経験2年目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの生徒について共有して関わることができた。関わり方を共有するためには、実際の介助の仕方を見て、配慮しなければいけないことを確認するのがよい。</li> <li>・授業中の姿勢について生徒に声かけすることが増えた。</li> <li>・研究協議会で社会科として活動する中で、見えにくさへの配慮について意識が出てきた。見えにくさに応じて指導することで子どもが分かりやすくなることが分かった。</li> <li>・ケース会でいろいろな人の意見を共有して、新たな気づけができて良かった。</li> <li>・触れ方、動かし方についてはこれで合っているかどうかはまだ不安なので、やっていけないといけないと感じた。</li> <li>・時間の指導の手ごたえはまだつかみにくい。座面圧計を使うとフィードバックしやすいが、手がかりとしてはまだ。</li> <li>・他の教員と一緒にであれば評価ができた。</li> <li>・計画～評価は一人だとまだ不安。ペアをつくって指導を受けたりアドバイスをもらえる形がよい。</li> <li>・昨年度までに引き続き脳性まひ児を担当し、聞くことができる体制であれば、その他の障害についても幅を広げていきたい。</li> <li>・子どもの指導に当たっているときは他の先生の様子をじっくり見れないので、他の先生の授業を見学する授業参観をしたい。</li> <li>・個別の指導計画(D表)については作ったきり活用していないので、見直したい。</li> <li>・いろいろアドバイスをほしいが、知識がないと混乱してしまう。初任者と組む教員が異なる指導法である場合、混乱してしまうような気がする。同じ指導法で組めるとよい。</li> </ul>
<p>【研修3年目(2015年): 肢体不自由教育経験年数3年目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担任している生徒を時間の指導でも受け持っているので、個別の指導計画と時間の指導の目標の関連を意識しやすかったので、次年度以降で他学部の子どもの時間を指導で担当した場合は、それらの関連を意識したい。</li> <li>・個別の指導計画から本人の課題をくみ取って指導していくことは大切だと思うので、教務として、個別の指導計画についてPDCAのサイクルを回すことに今年度取り組み、回せるようになったらいいなと思っている。</li> <li>・自身の時間の指導の自己評価が控え目なのは、まだ自信が持てないので他の人に聞いて自らで噛み砕いて指導しているから。自分が分かって指導できることをやっている。</li> <li>・教科だと自分の柱があるが、自立は柱がないので自分一人で授業に臨むのに不安。</li> <li>・ケース会での見方の広がり、その子について他者の意見ももらって広がり、それをもとに他の子も見るようになった。</li> <li>・教科での授業では、姿勢は継続して見て声をかけている。生徒の気分の浮き沈みについては人間関係や疲れ等によるものかと思う。楽しい話をして気分を盛り上げるようにしたり、それでもだめなときは板書をとることは参加させようとしている。</li> <li>・手ごたえというのが実感がない。動かし方の？という感じ。本人が言えているのでまだいいが、重度の子で言えない子になったら不安。</li> <li>・ペアリングではその中で話す機会があったので、話を聞いて参考になった。テーマ学習では、生徒本人と話し合う機会があったので、生徒の変化をつかめ、生徒の自己理解がふかまっている印象を受けている。</li> <li>・コース研修では2～3回ケース検討の機会があって、姿勢についてのケース会をした。この辺りの動きはどうなの？とかこういう動きを入れてみたらというアドバイスをもらったりとゆっくりと聞く時間があり、その後は自信をもってやれた。ありがたかった。ケース会では最初はふせんを書けず、見えていないんだなと思って、それから写真を撮ったりして見るようになった。ケース検討が1学期前半のうちにあればもっとよかった。</li> <li>・手ごたえが分からないという意味では、実技をもっとやりたい。</li> </ul>

#### IV. 考察

集計結果と表1を絡めながら考察する。研修を開始し1年が経過した際には、「何も分からない状態」から、他の教員からアドバイスを受れたり、研修を受けたりすることで、子どもの身体のことを見ようとする意識が出てきている。指導では、実態把握から評価までの一連については難しいという様子が見られるものの、「目標設定についてはできた」というように、部分的にできることが出てきている。しかし、子どもの変化をなかなか実感することが難しく、「研修を受けても時間の指導に自信を持つのは難しい」等の不安の強さが表れており、指導に困っている様子がうかがえる。

2年が経過すると、「他の教員と一緒に」という中ではあるが、不安を抱えながらも授業計画から評価までの一連の流れを一人で行えるようになってきている。また、「授業中の姿勢について生徒に声かけすることが増えた」のように、身体のことを見ようとする意識が、自立活動の時間の指導だけでなく、学習場面や生活場面といった場面からも、子どもの課題を捉えられるように広がりが見られてきた。実態把握から評価までの一連の流れを、研修で学んだ見方を活かし、自分なりの理解で指導を行うことで、自分は何ができて何ができないのかを把握することになり、結果として、できることが増えたり課題意識が出たりしてきている。このように自分で考えて指導するからこそ、「ケース会でのいろいろな人の意見を共有して、新たな気づきが出て良かった」というように、他教員との情報交換で、自分の見方や考え方が広がることにつながっている。

3年が経過すると、まだ自信を持てなかつたり、他の教員からのアドバイスを求めたりしている様子は見られるものの、「自分が分かって指導できることをやっている」というように、指導できる内容、方法が着実に自分の中に身につけてきている回答が出てきている。これは、2年目から継続して、自立活動の時間の指導で実態把握から評価までの一連の流れを自ら行っていくことを積み重ねたためであると思われる。さらに、日常生活場面も含めて子どもの課題を捉えていくことを繰り返すことで、「個別の指導計画と時間の指導の目標の関連を意識しやすかった」、「個別の指導計画から本人の課題をくみ取って指導していくことは大切」というように、個別の指導計画の意義を確認できたとの回答も出てくることにつながってきた。このことで、個別の指導計画を活用した他教員との情報交換がより活性化していくことになってくる。さらに、1、2年目も身体の動かし方に関する研修は必要としていたが、「手ごたえが分からないという意味では、実技をもっとやりたい」というように、自己の課題に対して意欲的・主体的に研修をしていく様子が見られてきた。

こうした教師の質的な成長を促すには、指導を通じて、「子どもの変化を実感すること」が特に重要であると考えられる。子どもの変化を実感するまでの過程は、まずは子どもの変化に気づくことから始まり、その気づきは時間の指導の場面とは限らず、むしろ学習・生活場面での姿勢や教材を扱う様子であったり、ケース会等での他教員からの情報交換がきっかけになったりする場合も多い。その気づきに対して、どのように関われば子どもが変化するのか試行錯誤を続けることで、このように関わると子どもが変わるという

実感を得られるようになっていく。

以上より、教師が主体的に学び、継続的に研修して専門性を高めていくためには、研修の内容を授業に活かす、授業で出てきた疑問を研修で解決するための研修体制を学校内に整備し、実態把握から評価までの一連の流れを自ら行うことを下支えできるようすること、その中で、指導法で子どもの見方や関わり方を学び、自立活動の時間の指導だけでなく日常生活場面も含めて自分なりの理解で実態把握をして子どもの課題を捉え、仮説を立て指導内容や指導目標を設定し、評価することを繰り返しながら、子どもについて話し合う場を多様に持つことが必要である。そして、その中で、自己の指導課題や子どもの変化に気づき、試行錯誤し指導を続けることで、子どもの変化を実感していくことが必要である。すると、自分の指導に少しずつ自信を得ていき、今後の研修課題がさらに具体的になり主体的に学んでいくようになってくる。その年限としては3年程度の時間が必要だと予想され、その期間は学校の中で上記のような研修体制を組織的に整えることが特に重要である。

## V. 引用・参考文献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2010) 肢体不自由のある子どもの教育における教員の専門性向上に関する研究, 研究成果報告書
- 2) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校編 (2008) 肢体不自由教育の理念と実践, ジェアース教育新社